梅園日記

巻三

内閣文庫

和書

類 | 號 | 冊 | 函 | 架
一八八五七 | 五 | 二二三 | 六

和書門

類 | 號 | 函 | 架 | 冊
一八八五七 | 二一八 | 一二 | 五

内閣文庫

番號	和 18857	
冊數	5 (3)	
函號	213	73

漫

新

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

梅園日記巻第三

日録

福引 一
花甲子 三
ぬく免鳥 五
銭若干字 七
馬代 九
さげ尼 十一
七日忌歸 十三
七草 十五
爪 十七
食素　素畫 二
案山子 四
勸學院雀 六
石帶幾筋 八
醉船 十
ゆめといふ詞 十二
優古堂詩話 十四
七草爪 十六
筑紫紀行　東路のたと 十八

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

閒木　十九
書籍曰本　廿一
帳　廿三
女房　廿五
嗾　廿七
石不可蹈　廿九
石咒病　卅一
五木　卅三
男兒作女粧　三十
八龍日九虎日五離日　廿二
不能為此錯　廿四
小兒額書犬字　廿六
乞子石　廿八
摩挲石　三十
藍尾　卅二
折木四　切木四　卅四

梅園日記巻第三

江戸　北愼言著

福引一

正月福引とて、闇夜にて人ふ物をとるするなり。物ふ見えざる八月堂夜話ふ、或人云、正月の福引ハ、昔を両人にして、餅を引合て、両方の多少取とる後ハ、其年中ハ禍福を見ることなり。今代ハ種々乃器物ふ取り代へたるゝ、餅を引取故ふ福引と名付とあり。又寶引ともいひくるるゝ、西鶴織留ふ、ある大名方には吉例とて、正月三日の夜、大書院にて、家久しき者ばかり召よせて、寶引を仰付られる。こゝに障子の内より、五色の長緒を數百筋投出ゝ、手毎ふ一筋づゝ引取、此緒の末ふ付置たる物を、下されれ

ゝる小ぜゝ引出し繩ゝ桑の木杖鐘木杖家老職の引出を繩
ゝ銀錢一貫文或を唐織乃巻物古物拵の脇差臼れ古きゝゝの
るもゝを提重箱長刀印籠巾著日傘張子の夜著蒲團ゝゝり
扨子をとるをあゝと云り按ゝ是ゝ似ることゝゝるゝゝり續日本
紀ゝ天平二年正月辛丑天皇御大安殿宴五位已上晩頭移
幸皇后宮百官主典已上陪従踏歌且奏且行引入宮裏以賜
酒食因令探板本採ゝ作ゝとり今一本及ひ類聚國史七十二ゝ役ふ短籍書以仁義禮智信五字隨其字
而賜物得仁者絁也義者絲也禮者綿也智者布也信者段常
布也とありまゝゝゝゝ似ゝるゝ漢土ゝも亦ゝゝり太平御覽
八百十七布帛部ゝ鄴中記云石虎以辰日臘子日祀祖大會群臣於太武
殿上使各三探乃有得絹百疋者有得數十疋者有得一二疋

者虎輒大笑以爲樂　武林舊事ゝ二月二日宮中排辦挑菜
御宴先是内苑預備朱綠花斛下以羅帛作小卷書品目於上
繫以紅絲上植生菜莽花諸品俟宴酬樂作自中殿以次各以
金篦挑之后妃皇子貴主婕妤及都知等皆有賞無罰以次每
斛十号五紅字爲賞五黑字爲罰上賞則成号眞珠玉杯金器
北珠篦環珠翠領抹次亦鋌銀酒器冠鋌翠花段帛龍涎御扇
筆墨官窰定器之類罰則舞唱吟詩念佛飲冷水喫生薑之類
用此資戲笑王宮貴邸亦多倣之　瑯嬛記ゝ致虛閣雜俎を
引ゝ云七夕徐婕妤雕鏤菱藕作奇花異鳥攢于水晶盤中以
進上極其精巧上稱賞賜以珍寶無數上對之竟日喜不可言
至黃昏時上自散置宮中凡上令宮人闇中摸取以多寡精粗

素食詳出風俗編及恒言録

為勝負謂之闘巧以為歡笑などゝ見えたり

食素　素畫

皇朝刻本宋の許親が本事方拒風丹の論證に母氏平時食素氣血羸弱とあり食素の傍訓を誤なり食素と訓べし素もゝ蔬菜をいふなり其證を顔師古が匡謬正俗に喪服傳記云飯素食案素食謂但食菜果糗餌之屬無酒肉也又班書霍光傳載光奏昌邑王過失云典喪服斬衰無悲哀之心廢禮誼居道上不素食王莽傳云每有水旱莽輒素食左右白太后遣使詔莽曰聞公菜食憂民深矣今秋幸孰公勤於職幸以時食肉據此益知素食是無肉之食今俗謂桑門齋食為素食蓋古之遺語焉又錢大昕が潛研堂金石文跋尾又續に大和七年青蓮寺碑有素畫彌勒佛之語按説文無塑字唐宋碑刻或作壔亦俗不若作素之為得也と云り是素を壔の正字と解たり廣韻に壔揑土容とありて土像なり此解誤也り按に禮記樂記の注に素生帛也とある素にて素畫を帛に畫をいふり其證もゝ不空表制集に載る大曆十二年十月沙門惠勝進興善寺文殊閣内外功德數文に奉勅素畫文殊六字菩薩一鋪九身云〻其所畫素大聖福田と云り此集も彼國に入伏して錢氏見ざれば誤もるもと宜なり然れども文苑英華を讀ものゝ知るべき也英華六百八十一卷梁肅が三如來畫像贊序に予嘗齊心命工裂素作繪とあり

花甲子三

葛原詩話云、范成大丙午新正ニ祝我剩（按ニ石湖詩集賸ヲ作ル）周花甲子、謝人深勸玉東西、丙午八石湖本命ノ歳ナリ、花ノ字華ニ作ルベシ、華ノ字、字畫成六十一、故ニ本命ノ年ヲ華甲子ト云　夜航詩話云、六十一歳曰華甲、蓋拆華字、爲六十一、猶四十八曰枲字年也、（何祇夢井生来事、見蜀志楊洪傳注）西遊記（第二十四回）問年壽幾何、道癡長六十一、行者道、好好華甲重逢矣、（按ニ本書花甲ニ作ル）范石湖、丙午新正、詩、祝我剩周華甲子、（按ニ本書周花甲子ヲ作ル）丙午、石湖元命之辰也、るどるハ華字を離せゞ華となるなり、六十一とゆるといひて、是よろしき説とゝゝゆゑとゝ非也、石湖の詩意を、本命丙午の元日、周花甲子六十年ヨ剩せるを祝せる也、周甲子乃六十歳なる證を、如面譚二集の注ヨ、六十爲花甲一周　翰墨琅琊の六十請人書ヨ、

浮生碌碌花甲初周　七修類稿ヨ、杭劉泰、成化癸巳六月、適當六十、同時詩人、皆以詩祝、張錫云、一週花甲等閑過、沈寧云、花甲循環喜一週、劉英云、花甲忽週遭、（又六十を週甲ともいふ、陶澍が印心石屋文鈔ヨ出ス）又六十一歳をも周花甲と云ふ、魏禧が魏叔子文集外篇ヨ、賀羅翁六十又一文ヨ、惟翁時値桂秋、歳周花甲、馮浩が孟亭居士詩稿ヨ、乾隆壬子、鄉闈孫男得舉ヨ、一周花甲重叨蔭、とゐるハ、雍正壬子より一周なり、まゝ仇遠が金淵集の、丁未元日の詩ふ、花甲喜循環、とゐる、集中を按ふ、仇遠を宋乃淳祐丁未の生れり、是を支干循環して、元の大德丁未、本命ハ年ニ成りたるを喜ぶと也、又按ヨ、六十以上ならば幾歳をも、周花甲といふ、ゐる也、四庫全書提要百二十二元の劉壎が隱居通議の條ヨ、

其水雲村稿中延祐己未重題梅氏海棠詩有花甲重周人八十之句まゝ豈有此理の還魂童生の一條ゝ近今六十以後周花甲矣名花甲童などいひまゝ此花甲の花字ハもろ〳〵そゝをもぬるゝ也其証を帯經堂詩話乃張宗柟ゞ附識ゝ愚嘗不解六十花甲之義皇華紀聞中言之甚明鐵樹如棕櫚榦甚奇古葉而不華在廣城提學公署見之按王濟雨舟云六十花甲子以鐵樹開花而名此樹遇六十年方開花昔宦横州親見此樹在一指揮圃中其人言洪武十年正統九年宏治十七年三開花矣今當於嘉靖四十三年再花云とあるゝ如べし

（按皇華紀聞言洪武十年十下脱七字堅瓠壬集引碧里雑存作十七年為是蓋洪武十七年）

堅瓠壬集亦此説あり

按ゝ此説亦非なり淵海子平ゝ夫甲子者始成於大撓子而納音成之於鬼谷象成於東方曼倩子時曼倩子既成

（正統九年弘治十七年嘉靖四十三年皆當甲子也）

其象因號花甲子と云る説是なり さて納音とゝ干支ゝ五行を配して甲子乙丑ゝ金丙寅丁卯ハ火戊辰巳己ハ木庚午辛未ハ土壬申癸酉ハ火ゝいふ象ハ花甲子あり 留青日札ゝ李淳風六十花甲子歌甲子乙丑海中金丙寅丁卯爐中火云〻とゝのゝ五行ゝ某の金某れ火ホの名目を加へ即其象あるをいひ 象すれゝ花ある故ゝ花甲子といひ

附識ハ花字を華ゝ作るゝ葛原の創説ゝ非ゞ舊ゝ説なり 然ゝゝゝ六十をいひ正宗贊乃注本保寧禪師贊ゝ杜撰巡宮華甲子指輪上一時亂了注ゝ或云華甲華六十也北磵小参尾云致令六十華甲子都打亂了（梅村載筆笠澤筆麈倶ゝ此説あり）京華集の天用立才禪尼乗炬文ゝ過華甲子則六十一年

まゝ蓮溪因公都寺預修兼炬佛事文ゝ殘生過華甲者二年。翰林五鳳集六十一歲試筆詩ゝ華年加一老生涯。策彦の蠡測集に華甲子ハ六十甲子ノ事ゾあゞ見えたり。されども唐土の書ゝ花甲の字を華ゝ作りたるものなし。正宗賛も白文本ハ花字あり。北磵文も改るゝ論なし

案山子四

玉池雜藻三編ゝ案山子禪語ゝ出。愚此文字を鹿驚ゝ當るゝ。或禪師ゝ問ゝに云案山ゝを大山ゝ添ゝ小山を云人なゝば前ゝ書案を置形也。陰ゝ有て不用の山ゝ影法師の意ゝ用立ぬ人ゝ案山子ゝと云と是ゝて思へゞ。ゝゝて作ゝ人乃影法師同前の物ゆゑ右の文字をかゝ用ひゝるべゝとゝり。按を

るゝ。いゝまゝたゝぬ僻説なり。隨齋諧話ゝ鳥驚の人形案山子の字を用ひゝゝ。友人芝山曰案山子の文字ゝ傳灯錄普灯錄歷代高僧錄等並面前案山子の語あり。注曰民俗刈草作人形令置山田之上防禽獸名曰案山子。又會元五祖師戒禪師章主山ハ高案山低。又主山高嶮〻案山翠青〻などゝり。按るゝ主山ハ高く山の主ゝる心案山ゝ低く上平ゝ机の如き意なゝん。低き山の間ゝ必田畑をゝゝきて耕作ゝ鳥おどゝ戯ゝ案山子と名ゝけゝを通稱するものなゝんといへり。徂徠鈐錄ゝ主山案山輔山と云ゝゝ多くゝれ山の中に北ゝあゝりく一番高く見事なる山あるゝ主山と定めて主山の南にあゝりてゝ形ゝ

山ありて上手よつくゑの形ゆがみたるなるを案山と云。左右よりさゝきたる主山をうけたる形ある山を輔山といふとなり。又按ずるに此面前案山子を注せる書いまゝ讀ゐるもその人の作とゐえて取るよたらば此事は和板傳燈錄巻十七道膺禪師傳に僧問孤迥迥峭山巍巍時如何師曰孤迥峭巍巍僧曰不會師曰面前桜山子也不會とあり。和本句讀を誤れり。面前桜山子也不會を句とすべし。子とは僧をいひて人をいふ。鹿驚の事にあらぬを論ず。案山を增集續傳燈錄巻四如珙傳に拈却門前大案山放你諸人東去西去などゐ禪家にてよくいふ語也。又按に此語をもて堪輿家とて地理の事を業とするものゝいふることも唐土にあるゝ人を葬る土地むづかしくて親あゞ死る時葬るべき地を撰ぶ彼堪輿家をたのみて撰ぶするあり。そもそも地をえあらぬぬ數年葬らで置るあゞあり。撰ぶもその詮もあるまじきなり。西湖遊覽志餘（佞倖盤荒篇）に蔡京之父準葬臨平山山爲馳形術家謂馳負重乃行遂作塔山頂以浙江爲帶水秦望爲案山何其雄也富貴既極一旦顛覆幾于滅族俗師風水之說安足憑哉（按に これ陸游いふるもの 入蜀記云宿臨平臨平者太師蔡京葬其父準於此以錢塘江爲水會稽山爲案山形如駱駝老学菴筆記にもまたこの說あり）是なり。ちゝ諸話に案山を低く上平らかに机のごとき意なるべしとあれど平らかなるをもいふべし。机の說を是なり。明の徐世彦が地理玄関（第三巻）朝案說に朝與案皆穴前對峙之山也所居之方位雖同所處之名分寔異何也案者乃隨龍之餘氣推于前爲穴之証佐者也如人之坐處必有桌案則手足方有所憑依

須要不逼不遥端正潔淨開面有情爲上苟歪斜破碎面飽脚飛皆非案山之善者細想弊几欹案不設于正人君子之前更認得案山之眞性矣まゝ鈴録よ南にあゝて離と山とのれども離とびともいへべし正南ゆと限らば其證と徐霞客遊記よ遊黄山日記よ望獅子峰已出遂杖而西是峰在菴西南爲案山とあるまゝ山をゝぬをも案山といへり夷堅三志周十翁墓章十翁墓処左右前後唯産茅茨獨對穴有古松一株指爲案山とのり

ぬく免る五

雅言集覽云後京極鷹三百首鷹のとることゞのうちのぬくめる冰る氷柱のなさけをぞ知る西園守殿鷹百首元さも

る氷とよれ鷹のぬくめるさまつ心もなさけをうる但此歌

塙本ゆ見えべ鳥柴雪といふ書ゆ出るり かの書ゆ異本なるべし按するよ別本まて然も注あり按よ臂鷹往來云鷹書者西園寺入道相國蟄居百首一冊園羽林

注注云ぬく免るとぬゆゆゆと言き表かきるを生なゞ鷹の両の手ゆく取るゝ豆をあゝむる也其朝はあちやを

て此鳥ゆとんとそ云へ行べ情をなほせ也とゆ又前の後京極殿三百首ゆと亦注本あり注云鷹の野をうける時ハ爪をふゝ嗜也小鳥を殺さゞるゝ我こゞをなゝめて ぬをば放つなり かををはあちやり其方へ三日ゆゝぶる変をつま孫の情を言るとやゆや又按るよ此事唐の代よりいひ〳〵説なり朝野僉載五巻よ滄州東光縣寶觀寺常有蒼鶻集重閣毎有鴿數千鶻冬中取一鴿以煖足至曉放之而不殺自餘鷹鶻不敢侮之 柳

宗元文集十六巻鶻説又有鶻曰鶻者完于長安薦福浮屠有年矣冬日之夕是鶻也必取鳥之盈握者完而致之以燠其爪掌左右而易之旦則執而上浮圖之跂焉縱之延其首以望極其所如往必背而去焉苟東矣則是日也不東逐南北西亦然　白氏文集三十六遇物感興因示子弟詩ニ鳩心鈍無惡云々鶻欺擒暖脚と作るもこれなり　文苑英華百三十六李邕鶻賦ニ夫其嚴冬冱寒烈風迅激或上棘林或依危壁身既稟於喬木骨將斷於貞石營全鳩以自暖罔害命以招益信終夜而懐仁仍詰旦而見釋ますと埤雅五雑組あどふと見えたり

勸學院雀六

勸学院雀囀蒙求といへること實物集八幡愚童訓ニよる出たり

富樫の舞頼政の謡ふといへる曽我物語ふと勸学院の雀とうやゝかれど」などいひもてはやされ日本國風勸学院雀の一條ニ閑窓倭筆を引く云雀とは勸学院ニ仕へて水を汲薪を運ぶ小女の名也其女此勸学院にて朝夕学問する人乃蒙求を誦を聞く常ふ口まねをするなふ雀の名ニたよりて略といふ也

按ニ勸勵讀書の聲を雀も聞覚えて王戎簡要ふと略ゆふきうるべし以上日本國風

按するニ閑窓倭筆に又云古來蒙求抄の題注ニよる蒙求の作者は李澣がはうふ女の名を雀といふそれまでゞ此蒙求を囀と云とあり甚非也古來の抄ゝゝ蒙求聽塵と彼ゝゝ此説見ゝゝ

あり今考るふ蒙求の開巻ふ載る李良ゞ薦蒙求表ふ李瀚撰古人狀跡編成音韻名曰蒙求瀚家兒童三數歳者皆善

諷誦とあり。瀚家兒童云々をづ[ゑ]く。瀚ゞ家の兒童ハ蒙求を
さへぎると。ふるき諺よいひ[ゝ]なるべ[ゝ]。唐人などのをのづ[ゝ]を
ぢ[ゝ]づるといへ[ゝ]をだせさるを後ふ瀚ゞ家を勸学院と誤る。さへ
づるといへるよ。兒童を雀と誤る也。又宋の方岳ゞ詩ふ黄鸝を
教得て書を讀こと成解せしめ。能蒙求中の一句を記せしむと。
いへる句などをも混ずたるまや。方岳秋崖集獨立詩ふ村夫子挾兎園冊。教得黄鸝解讀書。紙記蒙求中之一句。百盤嬌姹可憐渠。自注ふ。蓋俗以其聲為呂望非熊。此詩ふ早く伊勢物語ふ。月舟ゞ鶯誦蒙求詩。翰林五鳳集ふ。
古抄の説。やゝ是ふ近しといへべ[ゝ]。けゝく唐人あどのもはいつを。
さへぎるといへるを。敏達紀韓婦人韓語言萬葉集二巻ふ。訳さへ〳〵かゝの崎なるまさ。言さへ〳〵さへ〳〵の糸。十六巻ふ。さひづるや
うゝにふつき。冠辞考ふかゝ人の言。
安ゝうちかさきをいへりしと有り宇治拾遺物語珠價無量一條ふ。唐人もべさ[ゝ]ものなくて。貞重と白ひらる和歌ふ。
ホゝ。そのゆゝもあゝさへづりにそれを云ふ。又枕冊胡人見さる條ふ。
胡人ゝそ絵ふもちる姿しるものやうゝきもちぬをさうあひて云。なとゝ云へゝり

錢若干字七

今錢幾文を幾字といふ人あり非なり。僧景三の京華集ふ。慈得
菴主。東陽遼公首座予故人也。壬寅之冬。有書問予安否又孔
方兄八百字。副書見贈。惠意之厚。不知所以裁也。小詩一篇。謝
萬一云。兩个青錢双白璧。一封墨蹟百黄金。曾遊二十年前事。胡
蝶夢中千里心。とあり。これ兩个青錢とあるは二百文なりそれ
を八百字といひ[ゝ]れバ。一文を四字也。是後世を錢面ふ必四
字あればあり。ところ〳〵もけ定なり。自得語三十云。佛印持
二百五十錢示東坡曰。與你商此一個謎。東坡思之。少頃。謂佛
印曰。一錢有四字。二百五十個錢。乃一千個字。莫是千字文謎
乎。佛印笑而不答　七修類稿二十云。藥方中一字者。即錢文之

一字、蓋二分半也、とあり、

石帶幾筋ハ

莚響錄ニ、石帶を一筋二筋ともヤ也、不苦ヨ以式、何ヨ出るを不存也、普通ヨを、一腰二腰ともヤ格ニ見ヤ也、一丁二丁ともヤ也、台記、久安四年十月十九日、謁見禪閤、賜帶二丁、とあり、按るニ帶幾筋といひしヨ中右記元永三年十二月廿四日吾妻鏡貞應三年二月廿九日永仁御即位調度記、蜷川親元記寛正六年四月廿五日季瓊日錄延德二年正月六日二月十八日多聞院日記永祿九年八月五日などヨ見えたり、さて筋を條乃假字なり、

塩囊抄ヨ條ヲハスヂトヨム、五色糸一條ト云ハ一筋也　遊仙窟ヨ岸柳絲條

安祥寺資財帳、大安寺資財帳、法隆寺獻物帳、阿彌陀院寶物目錄、太神宮儀式帳、延喜式、長曆送官符ニヨ帶の數ニ條を以て、台記の丁字も、條字の音を借

るニをあらはせり、又幾腰といひしニ、河海抄若菜上ニ、李部王記を引て、犀御帶一腰、まゝ西三條裝束抄ヨ、金青玉ノ帶二腰あゝ見えたり、さて一腰一條、ゝ唐土ノ語なり、宋乃陸游が老學菴筆記ヨ、古謂帶一爲一腰、周武帝賜李賢御所服十三環金帶一腰、按ヨ、周書及び北史の李賢傳に、皆一要ヨ作ル、廣韻ニ要、說文曰、一身中也、今作腰、まゝ隋書李德林傳ヨ別賜九環金帶一腰駿馬一疋、柳表傳ニ賜綵三百匹金九環帶一腰、是也、近世乃謂帶爲一條、語頗鄙、不若從古爲一腰也、とあり、陸氏ヲ帶一條といふを近世といふを、唐の時ヨ也、昌黎文集、白氏文集、因話錄、酉陽雜俎、廣陵妖亂志、などニ出たり、舊唐書、又冊府元龜ニも見えたり、又幾具ともいふ、深窓祕抄、連阿不足口傳抄、名目抄等ニあり、是も亦唐土ニ例あり、東觀漢記、鄧遵傳北堂書抄、百二十九藝文類聚六十七ニヨ見えたり

馬代九

莚響録ニ小島の口すさこふ貢馬十疋内裏へ奉ル其外別て名馬などゝ送りこびたやうゝ。かひあるこちぞせと。見そのとやらん。今いと馬代のやうふ拙もれいふ。といふり按するニ馬代のヲをあゝはふ記したるを。季瓊日録云。永享十一年十月九日。正諫院。三寶院。實相院御坊。馬代被獻之。康富記云。寶德二年八月廿八日。午刻參大炊御門殿。若公九有御讀書始。欲罷出之処。被下引出物。（御馬太刀折紙也）祝著了。御劔（金覆輪）御馬（代百匹）日件録云。康正二年三月廿九日。到大智院。予出一緡代馬。宣胤卿記云。永正五年。八月六日。大内四品禮事。先年上杉四品之時。余上卿。馬代千疋太刀送之。後奈良院宸記云。天文四年九月廿一日。壽梁西堂長老被成。爲其禮云。大内親主へモ。當年。禮太刀一腰馬代千疋。御産所日記云。天文五年正月十二日。御馬代參百疋。拜領之。などあり。もろこふても。五代會要云。開成中。任圜奏云。伏見本朝舊事。貢獻雖以進馬。爲名。却將綾絹金銀。折充馬價。今乞從之。（舊五代史唐明宗紀ニ天成二年三月のヲ）とあり。

醉船十

寒夜筆談ニ。船ニ名ふといふこと。むゝよりいふり。太平記（東宮還御事）云。伊ある人も。彩ふを醉物ゝそいゝそと。云。とゝり。按するニ是より。ちさふ。土左日記ニ。かゝふふ名ひのあとぢ。ちまのお原いごゝや。こちくなりぬと。いふをよろこびて。ふぶそこよりかゝらをもこげ

く云、夫木抄雜十五に、大宰任まて下たるふかるひあさてもるひ
といふことまりふく、大宰大弐高遠卿「ころふるふかるふ人おりとき
はるるもるひとあるけるもあるん、なほさるもるは、鑑眞東征
傳に、天寶三載六月二十七日、至楊州新河乘舟、風急波峻、水
黑如墨、沸浪一透、如上高山、怒濤再至、似入深谷、人皆荒醉、但
唱觀音、とゝえるり、又車ふ醉ぬるを、今昔物語集廿八第二語に、紫野
樣に遣セテ行ク程に三人乍ラ、未ダ車ニモ不乘ザリケル者共ニテ云、三人
乍ラ醉ヌレハ、踏板に物突散シテ、烏帽子ヲモ落シテケリ云、此者共車
に醉タル心地共ナレバ」とあり、又按るに、和名抄に、辨色立成を
引て、苦船、布奈夜毛非と云り、苦車苦船の字、西溪叢語に出
るり、太平御覽九百十八、王隱晉書曰、郗詵母病苦車及亡不欲車葬、貧無以得馬、とあれハ苦車ハ久しき語なり、此外、肘後方、病源候論
に、注車注船といひ、表異錄ふ、蛭船蛭轎あり、蛭轎ハ、こるふなり、直語補證に、注轎甕牖閒評ふ注轎子あり、廣東新語、南越筆記に、船暈、まるに朱子偶記に、暈舡とあり、
通俗編に、苦船云々、集韻亦作瘧、按即今所謂暈船とるゝえるり、
まるに唐土にても、醉船といへり、惠濟方ふ注船、即俗名醉船とまるに
詞雅に、范纘が減字木蘭花の題注に、北人不善乘船、謂之苦
船、南人謂之醉船、又謂痃船とあり、注船、大吐、渴飲水者、即死、と丹溪心法類集、惠濟方ふに云り、知るべきこと也

さげ尼十二

梅窓筆記に、今の世に髮切の尼を云、さげ尼なり、けるく又後に、
髮をはるして尼ふなりしるもあるべし、續世繼長曆三年、五月
七日、けるくしるさせるに、あきとも社入道中納言世を捨て宿を
出るり身あれども物を云しきをむりなりるを、とよみて、この女

院へ〻そまつりたゝへる。ゆゑ返るふ。つのまも立〻きことのなく
さゝゐゞ二〻びせとも。そむゝげ〻ます〻とよませめ〻るゝはゞ久い
はゞ〻そゞせあひく。ゆちうふあるさせのゝんふるべ〻と云り。
按するゝ。此女院い上東門院なり。まゝ大鏡裏書云。上東門院。
萬壽三年正月十九日出家。年卅九 長暦三年五月七日。於法成寺。
剃除鬢髮とある是也。これより内きゝふゝ。婚記久安四年七月
廿日條云。鷹司殿源倫子治安元年十月出家。或説。長暦元年三月
十四日。於法成寺西北院。有御出家事。先度垂尼歟。まゝ上東
門院の後ゐも。女院記云。皇嘉門院。保元元年十月十一日。法
性ノ別業ニテ爲尼。年卅五。垂尼長寛元年十二月廿六日。九條
亭ニテ出家。　女院小傳云。建禮門院。壽永二ノ七。廿五赴西海。

元暦三ノ五ノ一爲尼廿九真如覚 文治元四廿九歸京。著吉田。今夜御出
家。なゞ〻ゑ〻ゝ。さゞげ尼のさゝゐを。花鳥餘情総角巻云。女の戒を
受るといふ。むゝひの髮をはゆて。あよゝやをゝゝそゞをいふなり。さゞげあるといふ
ものにあるをいふ也。又按するにさゞげ尼。おゐとよめり。新撰六
帖。衣笠内大臣。黒髮れをはかゝゝぬさゞげあまのゐゝことれもぢふ
ゐいあびきつゝ。けて有髮尼。天竺ものあり。四分律第三十云。六羣
比丘尼。自莊嚴身。梳髮。香塗身。諸居士見。皆共嗤笑　十誦律
第五十云。爾時助調達。比丘尼編頭髮。諸居士呵責言。汝比丘尼出
家ノ人。何用編頭髮。まゝ唐土ゐもあり。釋氏要覽巻上称謂篇云。式叉摩
那。此云學法女。似今尼長髮也。　皇宋類苑巻二云。泉州奏。未剃
僧尼。係籍者四千餘人。其已剃者數萬人。　池北偶談巻二十六云。尼

高髻盛粧衣錦綺行纏羅襪年十八九好女子也（按ニ松蔭閑談異巻一ニも亦ノ入リ）

ゆめといふ詞十二

少しのよをゆめといふこと歌よまれり西宮左大臣集「うたゝふもあらぬるこそかなしうめ夢ばうふらつといそれん」　萬代集戀一　大江嘉言「あふれもめばうつゝにものたゝはりはざらもす」　和泉式部日記「ゝさのまゝ今いもぬんゆめばうぬるとゝんつるゝ枕の袖」　千載集雜上　周防内侍「ゝれ夜の夢だうあるゝ枕よかひなくたむ名こそをしけれ」　俊頼朝臣集雜歌百首「うれしさい夢ゝうりぶふゝ拾どもかべよむひてよをすぐしけり」　隆信朝臣集戀六「いふふしてゝすどろむ程ふなぐさめて夢ゝゝふあふとゝる屋き」　家隆卿集戀部「うしみわびゝのぶ衣の

うゝてもゆめばうぐふこはもとてもゝむ　風雅集戀二　為家「ゝさて世のゝれぐさとゝ求やせむ夢ばうぐふぬゝとゝあきゝゝ」　續千載集戀三　よゝ人ゝらびゝゝるゝよ拾ゝ一枝の形枕夢だのりなる契りありとゝ　又四戀　亀山院「おゝぐ世ゝ見ゝ夢ゝうゝもかひなくて夢ばうりゝる人乃ゝもゝけ」　又文ゝ宇都保物語巻　ゆめばうりみてもたぐこのゝはする物よりて　今昔物語集十六廿九條　夢許も拾元うりゝゝを　落窪物語　たきゝものゝゝけいもぐにゝてをうりゝを　ゆゝえばうつゝゝゝきてゝぐりゝて　いとゝうばゝゝたきふほゝゝを　發心集　夢のゝくゝる尾宝をゝくるゝゝゝくゝをつゝひ待りゝゝう　又一日の巳家づゝ　ゆゝえかまゝくゝえ待りゝ」　又もろゝの詞も似る事ゝり

王若虚滹南詩話三に、蕭閑云（按に金の蔡松年字ハ伯堅、蕭閑老人と自号ス）風頭夢雨吹無跡（原本雨字を脱す、今絶妙好詞箋に滹南詩話を引くに従ひて補ふ）蓋雨之至細、若有若無者、謂之夢田、父野婦皆道之、賀方回有風頭夢雨吹成雪之句、又云、長廊碧瓦、夢雨時飄灑、と見えたり

七日忌歸（十三）

春湊浪話に、今の世は俗ふ、外へ行、事ありて、七日を経て帰るを、忌ものいふる事也、桓武天皇、延暦四年八月ふ、平城へ行幸あるべき、其留守に、早良太子人をして、種継を射殺さしめ給ふ事ありて、還御の後ふ太子を廢さしめ給ひ、程なく薨ぜ給ひ、そる故、行幸なるべき丙戌の日なるに、壬辰の日は七日にて帰るべきなり、是より七日を強く忌る事を忌ものふ、と水鏡ふ見えたり、と、按ずるふ、管見野水抄云、七日俗忌事、台記、久安二年三月廿五日、具今九条近衛殿、依吉日也、入夜歸宅、今九來此亭之後、當七日、有俗忌、但自他不可忌、由、尼御前御命、（按に本書此下ふ仍将恭の三字あり）又按するに、台別記云、仁平元年二月十六日、是日今麻呂加元服、廿二日、大夫歸對東廂、元服之前、在此廂、與元服後當七日、仍不渡本所、寢他所、依避俗忌也、又按するに、拾芥抄云、七日并十三日、歸本所、忌、宇治殿御時議定、（宇左記、仁平四三廿一、見天喜四四一五御門記）又按するに、速水氏見聞私記云、當七ヶ日忌、還家事、平戸記曰、仁治三年、四月八日庚申、今夕可有還宮歟之由、有沙汰之処、猶以延引、云々、明日相當七日之間、今夜之儀、俄出来也、一昨日有沙汰、殿下令問予、經七ヶ日還家、公私忌之、世俗之法、

古今之例也。可被憚之由申了。などゝ見えたり

優古堂詩話 十四

讀畫齋叢書中に收めたる。優古堂詩話を。悉く能改齋漫錄を抄出したる偽書なり。ちなみに清の文淵閣なる官本は。眞書なるべく抑もひとしく。讀畫齋本と同じさを。たゝ其證は。四庫全書總目。百九十五 優古堂詩話の提要。讀畫齋本に符合すれば也。今悉く引かんとすれば。それでいとゞ總目百四十 湘山野錄の提要より。吳幵優古堂詩話。論其以陽郇伯妓人入道詩。誤為陳彭年送中國長公主為尼詩とあり。按るに。讀畫齋本より。此事を載て。妓人出家詩と標して云。唐顧陶大中丙子。編唐詩類選。載陽郇伯作妓人出家詩。盡出花鈿與四鄰。雲鬟翦落向殘春。暫驚風燭難留世。便是池蓮不染身。貝葉欲翻迷錦字。梵聲初學誤梁塵。從今艷色歸空後。湘浦應無解佩人。湘山野錄乃謂本朝中國長公主為尼。掖廷嬪御隨出家者三十餘人。太宗詔兩禁各以詩送之。陳彭年作詩八句。今考其詩。與陽郇伯所作一同。首句盡出花鈿散寶津。一句不同。豈後人改郇伯詩。而託以彭年之名。而文瑩又不考之過邪。按小文瑩は野錄の撰者なりと見えたり。かく提要にあるまで。官本と同じきを見れば。ちなみに此文とあるも。能改齋漫錄卷三に出たる。寶津を玉津より作るのゝ。又按するに。眞本優古堂詩話に。李日華が紫桃軒雜綴卷二。初學集卷九卷十の錢曾が注。厲鶚が宋詩紀事。卷九。十一。十二。十五。十六。廿八。卅三。卅五。四十一等に引たり。さるとゝ其詩。讀畫齋本より。一首も載る

ゆなり。

七草 十五

世説故事苑ヨ。七種を搥ゆ。事文類聚ヨ。歳時記を引く曰。正月七日多鬼車鳥度家〻搥門打戸。滅燈燭攘之。和俗七種菜を打つ唱ヨ。唐土の鳥。日本の鳥。渡らぬさるなりと云るハ。此鬼車鳥を忌意あり。板を打鳴らせ。鬼車鳥不止。ゆえに攘也といへり。按るに。此説是なり。桐火桶（定家卿れ作と称ス）ヨ。正月七日七草をそゝくに。七ぢ〻七度四十九たゝく也。七ゆハ七星なり。四十九ゝくハ七曜。九曜。廿八宿。五星。合て四十九の星をまつる也。唐土社多と。日本社多と。ゆゝぬちきふ。七ゆなづなゆゆ。ゆゆ法そいとく。元菁斗張とあり。元菁斗張とハ。廿八宿の中の星社名なり。（まゝ旅宿問答ヨ七日の七ゆハ在天七星在地七草とあり）星の名を書て。鬼車鳥社鄰の天鳥を逐事を。周礼秋官ヨ。若蔟氏掌覆天鳥之巣以方（注ヨ方版也）書十日之號。十有二辰之號。十有二月之號。十有二歳之號。二十有八星之號（注ヨ自角至軫）縣其巣上。則去之と云り。天鳥ハ鬼車の類なり。元の陳友仁が序ある。無名氏周禮集説ヨ。劉氏曰。天鳥者陰陽邪氣之所生。故欲妖怪而不祥於人間。夜則飛騰所至爲害。若鬼車之類皆是（書録解題ヨ。周礼中義八巻。祠部員外郎。長樂劉彝執中撰とあり。劉氏ゆゆ）と見えたり。三善為康の掌中歴ヨ。永久三年（三年の二字拾芥抄ヨ據て補ふ）七月の比。都鄙ヨ鵄あり〻ふ。十日。十二辰。十二月。十二歳。廿八星の號を方に書て縣る事見えたれど。こゝふも周禮の説行たるを初るべし。後世の書ゆを。清異録ふ。梟見聞者。必罹殃禍。急向梟連唾十三口。然後静坐。存北斗

一時許可攘まゝ埤雅釋鳥ニ傳曰梟避星名これ亦星乃惡鳥を攘ふまを初るべし彼を嵌中花行ぶとゝ云ふ六日の夜より七日ニ彼まて七草を打ち七草双紙ニ七草を柳木の盤ニ載く玉椿の枝まて六日ニ酉の時ニ芹をうち戌乃時ニ薺亥の時ニ御ごゝろ子の時ニたびらこ丑の時ニ佛ノ座寅の時ニ鈴菜卯の時ニすゝしろをうちて辰乃時ニ七草を合て東の方より岩井の水をむすびあげて若水と名ケ茶此乃まてはゝゞ乃れてうぬけきニ服とるゝば一時ニ十年つゝの歌を唱へ七時まて七十年のとゝを忽に若くなるゝ云此はゝゞ乃るのまい云まもたゝぬ仏りことあれど今も六日の酉の時よりたゝくも亦根芹の謡ありも云り桐火桶ニ七度たゝくとゝ云る法とす

七草爪　十六

正月七日七草爪とて人ゝ爪ニ必爪きるを前條ニ云る鬼車鳥人の捨つる爪をとるとゝ云ふ説あれど爪をとるとゝ云ふ乃ゝ乃を攘ん料ニたゝ爪つる七草を水ニ浸し其水まて爪をぬゝしてきるを日次紀事ニ云ふ七草を煮て湯あゝ爪を洗ふとゝ云り乃ゝ乃る爪とるゝ乃ゝ玉燭寶典巻十ニ博物志云鵂鶹鳥晝目無所見夜則目明人截爪棄也此鳥拾取知其吉凶鳴則有殃也今本博物志此事なし北戸録巻上ニ陳藏器引五行書除手爪埋之戸内恐為此鳥所得其鵂鶹即姑獲鬼車鴟鵂類也嶺表録異ニも亦此説あり と見えたるゝ初るべし ちゝ正月あゝぬ時も小児の爪をそゝぐに捨ぬなり清朝まてもあり盧文弨ガ鍾山札記ニ淮南子高誘注ニ云鴟鵂謂之老蒐夜則目明合聚淮南子各本拾

聚ヨ作ル人爪以著其巣中今人翦小兒指甲率置隱處不欲棄擲庭院間則亦因高説以爲戒耳とあり

爪　十七

爪のたいでふいてん爪紅さすもの女郎花物語云ふうためとりるゆびれさそうかくるもうあるふ爪ふいくちしふたるもむくつけくさこそ乃ゑえ侍れ」とかりもろこしふを古今事物考冠服門云染紅指甲唐楊貴妃生而手足爪甲紅謂白鶴精也宮中効之（まこと鳳仙花ゆく染るす　癸辛雜識續集ヨリ）又すくあさるもを爪のあるほどくいつもも犬筑波集ヨ爪くそもはもぬ中　隆寛の捨子問答ヨ積所の悪業煩悩十方の土よりも多く一期の念佛も喻るに爪乃上れ土よりも少し」などあり見ハ雜阿含經十六云彫土甚少少耳此大地土甚多無量（又涅槃經卅四）とあり又婦人小兒ゐど手指ゼ爪ヨ白き小点あるをものさほとるくく衣服他るべきもるるくもといり是も格致鏡原ヨ物類相感志人或爪甲上生白瑕拂拂然謂之爪花得服飾之兆俗人爲驗常無失とあり又掌のかゆきも人の物くるるもしも也といり宋本泊宅編ヨ王黼每有慶事則微庠而動揺率以爲常とあり掌ゆもあゐ祢どを仏くるる也（因ヨ云通俗編ヨ物類相感志人或下頤無故癢搔不止賞良異味とこえくる）

筑紫紀行　東路のたもと　十八

群書一覽云西國記行宗長法師文明十二年周防山口へ下る道の記也一本筑紫記行と標せり此記行を宗祇の作とするハ誤也　秉穂録云宗祇筑紫紀行ヨ文明十二年あり二毛の

昔より、六十の今にゐるまで、といふ詞あり、東路のつとに、永正六年ゐるまでとあり、文明十二年より、廿九年後なり、宗祇の年八十八九なるべし、高年まで、旅行のまいぶり、他書より、文亀二年に卒ぬといふ、永正六年より、七年前なり、いづれか是なるや、　隣女晤言云、宗長の宗祇終焉記ゐる、文亀二年七月晦日、八十二歳なり、孫をもうけるよしたゝる也、然るに、宗祇筑紫紀行に、文明十二年なり、其年六十と見えたり、又東路のつとに、永正六年とあり、文亀二年より、七年以後なり、雪玉集に、永正十一年七月廿九日、當宗祇十三回之遠忌、とあり、よりて、東路のつとに、誤なるべし、などいへり、慎言云、今宗祇終焉記に、従ひて、文亀二年を、八十二歳として、前へかぞへるに、

文明十二年に、實ゐ八十歳なれど、筑紫紀行、宗祇なるゆ論あり、或云、宗祇宗長と、同年なんゆゑ、筑紫紀行宗長なりとも、定がたし、群書一覽所見ありて、いるなるべしと云、考るに、宗長宇津山記に、永正十四年、七旬のよしあり、又同人手記に、大永四年七十七、五年七十八、六年七十九、七年八十なるゆ見えぬ、又同人享禄三年の記に、八十三歳のよしあり、是ゐ據るに、宗長を、文安五年戊辰の生なり、文明十二年庚子、七三十三歳なり、筑紫紀行、宗長なるぬを、初歟、又東路のつと群書類従本に、宗長とあり、一本に宗祇とあるも、出中を、後見ゆゑ、宗長なるゆなるゆ也、書中云、撰手の紫世、代一座より出合、必後河ゐ、なるゆ来るべきよし、伝りしかば、家庵をうつ

類聚名物考武説云宗長六十歳永正四年誕一男子蘇心傳菴兼范喝食是也

乃山道の杉よはふ苔の細道とぞをしへし」と
あり永正はたゞ矣より宗長後河内の守津山にもとる事宇
津山記よあり。東海のつとゆ又云。綱重てよりかゝふふをし
て。又いつゝとなどいひ袖をむくて三千ばかりおすぐふる
はの杉赤い苔のゐるまゞ身をもをしまん。綱重長河内辛乃
よしといを。たのまぬ身ふ〳〵も。又行末をたゞ心をゐべし」とたり。
長河ハ即宗長なり。六千あまり国〳〵ふるを。六千二ゐふり。
文安五年戊辰乃生ゐをた。永正六年己巳。実ゆ六十二歳也。
国書を物ふ「かり衣旁やふるさほと保ゐ保風「ゐかゐとや萱が
下葉の秋乃風。の句あり。此二句ゐ新山記ふ。新田の静喜の閑
居まて「のり衣云。まゝ武義略のあるり。海りのゐるゆ旅宿まて

ふと興行「ゐこの秋や云」是ホを系考ゐをば。東海のほと。
宗長が作ゐるゆ乃よゝ〳〵ゆるゆ也。

間木　十九

かげろゐ日記云。むごろといのゆうとり。すゝをれこゐひつる
もふはふなげちゝ。ずゝをまきようちあげゐどゝらゝが
ちゝきまでよ。いとぞいのやゝしき　今昔物語集十六第十云。新羅國
ニ國王ノ后有ケサ。人ニ通ジテケリ。國王大ニ嗔テ后ヲ捕ヘテ。
髪ニ縄ヲ付テ。間木ニ釣リ係テ。足ヲ四五尺計引上テ置タリ
ケリ。　又十九第廿二條云。夏比麥縄多ク出來ケルヲ。客人共多ク集
テ。食ケルヲ。食残シタリケルニ。少シ此レ置タラム。舊麥ハ藥ナド云ヌ
レバト云テ。大ナル折櫃一合ニ入テ。前ナル間木ニ指上テ置テケリ。

又（廿八第卅條）云、荒巻三巻ヲ間木ニ捧置テ（宇治拾遺物語亦同）台記康治元年五月十六日記云、今夜御物語之次、及法皇誕生時事、仰云、朕在孕時、贈后母、祈生男於賀茂之明神、夢中居衣袖、通言語、他日又夢、當生男、可取在間木之物、夢驚探間木、得銀龍作物也（續古事談亦同）などみえたる間木をいふなるべしとおぼしき。玉藻、承久二年正月二日記云、今夜御戴頂之儀、主上乍蓋取餅（大根三筋、橘一枝三九入之）、當御頂、祝言曰、位カタカレ、命幸カタカレ、則返給大夫、次取大根、其末ヲ一結シテ、當御頂、祝言如初、置間木上、玉海、承安三年正月一日記云、參關白第、是當腹小兒爲令戴餅、余取餅（乍三枚取之不取蓋）令戴若君額、上三度（俗有祝詞歟）如元置蓋中、取橘并齒固等各三、置東面妻戸上、長押上、是定事也、玉藻、承元四

年正月一日記、又云、有小兒戴餅事、於寢殿東面妻戸、有此事、余令戴之、先取餅令戴（乍蓋取之）、祝詞、官位カタカレ、命幸カタカレ、以餅三度當頂了、則以蓋返給女房、次取橘觸頂、上長押打揚（三成橘）、次第如此、三度、次取大根觸兒頂、詞皆如此了、又打揚（三筋）などあり、是ハ小兒五歳まで、初春頂餅（又いくさもち）といふことのあるを記し給へる也、さて上ハ引さる、承久二年の記ハ、大根橘を間木上ハ置とぞ見え、承安三年の記ハ、東面妻戸上、長押上ハ置といひ、承元四年の記に、上長押ハ打揚とあるハ、間木を上長押あるものゝ也、さる程契冲師校本のかけるハの日記に、ずゝもまきて、うちあげなどゝ、改めゝり、解環も此校本に從ひゝ、數珠もまろばし打ぬぎ、乱かゝきさゝをいへりと、注せるを、誤り也、

はんでふいと。新撰六帖よ。行家をされるれ春のすゑのいくぐきふつのさ位ハそるゝあぎつ。とゝえゝゝゝゝかの玉藻承元四年の祝詞の如く。官位かゝゝゝと。祝ふをよゝゝゝ也。官位のゝふも非ズ。古事談ニ。安藝守基明。嬰子之時。正月戴餅之間少納言入道祝言。才學如祖父。文章者如父。ゝどもいゝゝ遵生八牋云。呂公記。九日天明時。以片糕搭兒女頭額。更祝曰。願兒百事俱高作三聲糕と高を同音なり。ことゝ重陽ゝて。日いたゞゝどもよゝ仏るわざ也。

男兒作女粧サ

今子あゝゝまうけても。育ち難きふ。男子をば。女の容ヨ作ゝて女の名をけゝ。女子をゞ亦容をゝ名ゝも。男になゝて。育つる者ありもろこゝふゝゝも久ゝきゝはゝあり。唐の李匡乂ゞ資暇集ヨ。俗生男必紿云女。女紿云男。意者以其形新醜怯慮鬼物知而逼攝不欲誠告。とゝゝり。今清朝ふてゝあほ然り。梁玉繩ゞ瞥記云。杭俗生子。多以姑娘呼之。取其易養也。最為陋習。世下ヨ男子ゝゝ女名ゝりゝゝものを挙ゝ亦其類也。とゝゝゝゝもうけ難を設ゝり。按ヨ男人女名の事。陵餘叢考ニ知録ゆも出ゝり。まゝ袁枚ゞ新齊諧ヨ。蜀人滇謙六。富而無子。屢得屢亡。有星家教以壓勝之法云。足下兩世命中所照臨者。多是雌宿。雖獲雄無益也。惟獲雄。而以雌畜之。庶可補救。已而綿谷生。謙六教以穿耳梳頭裹足。呼為小七娘。娶不梳頭不裹足不穿耳之女。以妻之。果長大入泮。生二孫。偶以郎名孫。即死。于是毎孫生。亦以女畜之。燈月縁傳奇ヨ。陳貞玉とゝゝ女子。故ありゝゝ。男粧ヨ扮て。家を逃を出ゝ途中にゝく。田登とゝゝ官人ヨ遇ひゝく朱子辰と。名氏を

偽り登が養子となり姓名を田豊と改たるゆゑにて養母房氏の問ふ言は兒阿你緣何兩耳有穿疤とある答は不瞞母親説兒在幼年多病恐養不大那時女扮過的と云り又子乃そゝぬるの赤子を拾ふ他人は拾ふをせやそれをたゞけて育るあり是も亦似るゆゑなり宋の吳箕は常談は今人有子艱育者多乞他姓其來蓋久後漢憲帝數失子何后生子養史道人家號曰史侯王美人生子協董太后自養號曰董侯以他姓爲小字非獨今世也まゝ劉宋の劉敬叔が異苑は臨川太守謝靈運初杜明師夜夢東南有人來入其館是夕即靈運生於會稽旬日而謝玄亡其家以子孫難得送靈運於杜治養之十五方還都故名客兒（自注は治音稚奉道之家靜室也とゝれも亦似るゆゑあり）

書籍曰本　廿

客問書籍言本有明據哉答曰皇朝類苑日本下云安南郡督吳越錢氏多因海船通信天台智者敎五百餘卷有錄而多闕賈人言日本有之錢俶置（按は致ふ作ゝ音同きふゝて誤り）書其國主奉黃金五百兩求寫其本盡得之訖今天台敎大布江左矣（白河燕談）佛國記は北天竺諸國皆師〻口傳無本可寫とあり晉時書籍を本とせり（寒夜筆談）孔子家語後序天漢後魯恭王壞夫子故宅得壁中詩書悉以歸子國皆所得壁中科斗本也トアレバ本ト云フ久シケレド本義明ラカナラズ（昆陽漫錄）書籍を本といふゆゑ後漢書は草本と見え皇朝類苑は本とばかり見えゝ正本は北史ふんあ（和訓聚）先賢行狀云延篤少從唐溪季度受左氏傳欲寫無紙乃借本誦之（藝文類聚後漢）

書延篤傳注引又北齊祖珽傳寫畢退其本曰云〻蓋六朝以來屢以本言之也
但白氏六帖載漢河間獻王從民約借善書必好書寫之留眞本
加金帛賜以招之然此據漢書河間獻王傳原作留其眞無本
字白氏即由師古注眞正也留其正本之言而加之耳然則當
以延篤所言爲始也閑窓雜録按もろふ文選魏都賦注李善曰風俗
通曰案劉向別録讎校一人讀書校其上下得謬誤爲校一人持本
一人讀書若怨家相對爲讎とあるを始とすべし

附識 今皇朝類苑の全文を閲るふ開元中有朝衡者隷太學
應舉仕至補闕求歸國授檢校祕書監放還王維及當時名輩
皆有詩序送別後不果云歷官左右常侍安南郡督吳越錢氏
云〻とあり又唐會要卷一百小日本國開元初遣使來朝云〻其偏使朝臣

仲滿慕中國之風因留不去改姓名爲朝衡歷仕左補闕終
右常侍安南都護　舊唐書東夷傳ゑ朝衡仕歷左補闕上
元中擢衡爲左散騎常侍鎮南都護とあるふ據もて安南
郡督を朝衡ゞ歷官なるを燕談ゑ吳越錢氏ゑ屬せしを
誤あり又舊唐書類苑互ふ誤あり舊唐書左散騎の左と
右の誤り鎮ハ安乃誤り類苑左の下ゑ補闕の二字を脱し
郡督を都護の誤りなり

八龍日九虎日五離日廿三

吾妻鏡云嘉禎四年正月十八日乙丑將軍家御上洛事有評
議來廿日御出門廿八日可有御進發而件日八龍日也御出
門之後者不可憚事歟東鑑要目集成云八龍日八三輪寶ナ

安德天皇御記五十日治承三年正月六日乙丑今日東宮御五十日也去年十一月十二日降誕今年正月一日當五十日其間無没日仍以滿日可有此事也而元日中日二日御衰日三日四日五日八龍日次之間及今日也慎言按五日甲子也

リ。亥寅午ノ日ヲ。三輪寶ト云。俗ニイボヲ結バ。火災アリト云リ」。按するに。三輪寶ハ三隣亡ふ作るべし。（簠簋内傳ふ出ふ）けもとを八龍日をを三隣亡ふ非ぞ。上件の廿八日を乙亥あり。春乃乙亥は八龍日ゆゑ。出行をを忌日なり。又百練抄云。平治元年八月十六日。上皇仙居。高松殿炎上。或記云。件御所。去月十九日。加修理有御移徙。九虎日御渡。人傾申之。果有此災といつり。日本長暦ふ據るふ。是年七月を。壬午の朔ゆゑ。十九日を庚子あり。秋の庚子を。九虎日なて。移徙をも忌日なり。日法雜書云。八龍（春甲子乙亥八人死）七鳥（夏丙子丁亥七人死）九虎（秋庚子辛亥九人死）六蛇（冬壬子癸亥六人死）右四箇日。佛事。移徙。嫁娶。起土。送葬。拜官。出行。公事。大凶也。吾妻鏡又云。建長四年。四月四日丁巳。親王家御濱出。并御弓始以下。

日次等事有其定。大藏少輔泰房申云。十四日。廿日陰陽大允晴茂申云。十四日爲吉日。廿日頗不宜。五離日也。就中被用兵杖可有憚。要目集成又云。五離ハ。申酉ノ日ヲ云嫁娶ニ忌日ナリ。（按ふ拾芥抄に五離日申酉日号之嫁娶等憚之とあるふ據るり）又按るるふ。廿日を癸酉なり。けもとも嫁娶のるゆゑ。祢ぞ。てゆゑ。考るに。五離日を。針灸を忌日なる故。兵杖を用ふるふも。憚有べしと云へるん。黄帝蝦蟇經云。戊申己酉（天地離日）壬申癸酉（鬼神離日）甲申乙酉（人民離日）丙申丁酉（江河離日）庚申辛酉（金石離日）（月令廣義に忌鑄銘）壬申癸酉（江河離日）（月令廣義に忌乘船裝載）と見えて。戊申

（急就篇ふあり）ゆゑ。五行大義（論合篇）云。五離者。甲申。乙酉。天地離（月令廣義ふ。下に云忌開市販易）丙申丁酉。日月離（月令廣義ふ。忌爐冶會客）戊申己酉。人民離（月令廣義ふ。忌出行嫁娶）庚申辛酉。金石離（月令廣義ふ。忌鑄銘）壬申癸酉。江河離（月令廣義ふ。忌乘船裝載）と見えて。戊申

己酉の〻嫁娶を忌く.蝦蟇經の説と異なり.さて判を判ふ誤とる事も.出雲風土記解日本靈異記考證.おどふもいへり.又按もるふ　皇朝の古書判を判ふ作もるもの多〻.天台六拾卷音義刀下ふ判字あり.判字判ふ形似る故ふ誤り〻也

帳　廿三

珍書考云.後漢ノ桓帝ノ時.賣買ヲスル市中ニ.假ニ木綿ノ素帳ヲ張テ.官人ノ往來スル道ヲ分ツ.時ニ竇郭ト云者ノ賣物.甚ハヤリテ.竇市一日ふ千金ヲ納ルナド、.文人ノ詞アリ.然ルニアマリ繁昌シテ.一日ノ賣販ヲ書シルス竹卷ヲイトナム暇ナカリケレバ.彼木綿帳ノ端ニ取アヘズ記シ置ケレバ.是ヨリシテ.世ノ人.紙ニ書付ル賣買ノ紀錄ヲ.帳ト云.右ノ説ハ.兩漢博聞別錄七卷廿九枚メニ出タリ.日本ニ此帳ト云事ハ.後宇多院ノ比ヨリ云ト見エタリ」とあり.此事偽説なり.兩漢博聞といふ書十二卷あり.「より七ふ至て.前漢書の語.八より十二ふ至て.後漢書の語を.類を分て抄錄〻る書なり.ちもとを別錄といふものなる事なり.又木綿皂帳も.梁書武帝紀ふ.始めて見えく.漢代時すはいまだあらざるもの也.まふ俗耳談云.事を記もるもとを帳といふ.是即唐語也.五雜組ふ.漆帳といふことえ〻〻り.他ふもいまだ〻〻.とかもとを.明の周祈が名義考ふ.今俗謂簿籍曰帳目.韻書帳.疇也.惟也.無有以簿籍為義者.按漢制郡國歲時上計.顔師古曰.計若今諸州計帳.是師古亦

用帳字其來久矣　張宦光が說文長箋ふ帳張也此以張訓帳釋名義也今帷幔通偁又借物數開單也正取張義　清の周亮工が因樹屋書影ふ北魏書釋老志曰元象元年秋詔曰城中舊寺及宅皆有定帳今人出入之籍曰帳目始此　王棠が知新錄ふ帳帷幔之通稱武帝時有甲帳乙帳而後計事物之數亦曰帳查唐太宗時大理少卿胡演進每月囚帳唐六典歲錄其民之數與地廣狹爲鄉帳又具來歲度支爲計帳以冊籍爲帳當是唐前之語至唐始見於書也　翟灝が通俗編ふ周禮遺人疏當年所稅多少總送帳于上漢書光武紀注郡國計若今之諸州計帳也北史高恭之傳祕書圖籍多致零落詔令道穆總集帳目按幃幄曰帳而計簿亦曰帳者運籌必在幃

帳簿錢大昕恒言錄亦云

幄中也今市井或造賬字用之諸字書中皆未見　趙翼陔餘叢考ふ賬簿古人作帳字北史宋世良括丁河內魏孝莊帝勞之曰知卿所括過於本帳若官皆如此用心便是更出一天下也又後周蘇綽始制計帳戶籍之法隋書開皇十年詔凡流寓之人悉屬州縣墾田籍帳皆與民同又裴政傳趙元愷造職名帳未成劉榮云但須口奏不必造帳及奏太子問帳安在元愷曰劉榮謂不須造帳唐書宇文融傳鉤檢帳符得僞勳亾丁甚衆皆作帳　梁玉繩が瞥記ふ魏書官氏志太和十九年詔詳定北人姓三月一列簿帳送門下以聞釋老志城中舊寺及宅並有定帳似帳字始見此漢書孝武紀後書光武紀注並有計帳語北周書蘇綽傳始制文案程式朱出墨入及計帳戶籍之

法。顔元孫干祿字書序。籍帳文案。皆在此後。唐書百官志屢見此字　左暄ら三餘偶筆に。爾雅釋訓。幬謂之帳。釋名帳張也。張施于牀上也。後世以帳爲計簿。唐書百官志。有掌戶籍計帳者。有察戶口流散籍帳者。有掌工人簿帳女工者。有掌外府雜畜簿帳牧養者。而顔師古註漢書武帝紀。受計于甘泉。謂受郡國所上計簿。若今之諸州計帳。章懷註後漢書光武帝紀。越嶲人任貴自稱太守。遣使奉計。謂計者人庶名籍。若今計帳。若今云者。是唐時人有此語也。今帳字俗皆作賬。字書無此字　顧祿ら清嘉録ゟ。前漢武帝紀。明堂朝諸侯。受郡國計。計。若今之諸州計帳也。韓愈寄崔立之詩。當如分合支。注。今時人謂析産符契爲分支帳。今俗作賬。古無此字。なとゝ云へ〳〵

不能爲此錯　廿四

通鑑八十唐紀ゟ。天祐三年。羅紹威既誅牙軍。雖去其逼。而魏兵自是衰弱。紹威悔之曰。合六州四十三縣鐵。不能爲此錯。とあり。澁井太室ら讀書會意ゟ。此事を載せて。錯鑢也。言雖用多多之錯。此失竟不銷磨也。安積覺釋爲誤者。非也。按するふ。安積氏の湖亭涉筆ゟ。錯釋爲誤取鑄鐵爲喻。とあり。又按するゟ。通鑑胡三省の注ふ。羅以殺牙兵之誤取鑄錯爲喻とあるをゝれば。安積氏の釋ハ非なゝ。（錯を鐵と誤るのみ）澁井氏の説ゝへハ非なり。失い錯を以ゝく銷磨をべき物ふ非ぞ。羅氏のゝゝるハ。吾所部の六州。（魏相博衛貝澶ゟり）此下ゟ四十三縣あり。其縣中にある鐵を。皆合をとゝ。此大きなる錯を爲ことゝゝるゝとあり。

是表〻を錯を云〻。裡まい錯をいひ。通鑑綱目集覽ふ。錯七各反。摩鑢銅鐵之具也。今俗謂事差誤亦曰錯。魏博藩鎮所部有州六縣四十三。今羅紹威謂合此州縣中鐵亦作不成這一箇大錯。蓋自悔前所為太差也。とあるゆゑ。時ふ〻ゆゑ。もと此ふゆ北夢瑣言十四巻ゆ出て。六州四十三縣鐵打一箇錯不成也。と見えたり

女房 廿五

本朝俚言ふ。女房の二字をあげ〻。瑯邪代醉編云。室家女房奩五百千。以禮遣之。と引り（茅窓漫録ゆも。女房と云ハ。此邦のみなあ〻び。瑯邪代醉編云〻。といふゆゑ。ゆゑ。）按ずるゆ此ふゆ代醉編十五巻ふ。鄭景望記聞云。乖崖（按ふ宋人張詠自号なり）帥蜀時。給澣濯紉縫二人。垂厓悅一姬。中夜心動而起繞室行。但云張詠小人小人。遂止。將歸出帖子。議親云某室家女房奩五百千。以禮遣之。蓋未常有犯也。とあり。室家女を句とすべ〻。房奩の二字ハ。連續したる語ゆ〻。よめいりの支度をいふ。其證ハ夢粱録ふ。嫁娶前一日。女家先往男家。鋪房掛帳幔。鋪設房奩器具珍寶首飾動用等物。西廂記（白馬解圍）ゆ。崔夫人云。此計較可。雖不是門當戶對也。強如陷于賊兵之手。長老在堂上。高吽兩廊僧俗。但有退兵之策的。到陪房奩。斷送鶯鶯與他為妻。水滸傳ふ。清河縣。裡有一箇大戶人家。有箇使女。小名喚做潘金蓮。年方二十餘歲。頗有些顏色。因為那箇大戶要纏他。這使女只是去告主人婆。意下不肯依從。那箇大戶。以此恨記於心。却倒賠些房奩。不要武大一文錢。白白地嫁與他。

（延事叢殘示室周氏房奩銀二百六十兩）

金瓶梅ヨ倒賠房奩要尋嫁得一箇相應的人あどるふく知べ〳〵女房を女のすめる房あり實よとろこ〳〵ふも女房の字面あるなり華陽國志蜀志云乃自前堰上分穿羊摩江灌江西於玉女房下　水經注云芭水出南山芒谷北流逕玉女房水側山際有石室世謂之玉女房　太平寰宇記七十三云永康軍導江縣玉女房李膺益州記云其房鑿山爲穴深數十丈中有廊廡堂室屈曲似若神功非人力矣　又八十六益州記曰閬中盤龍山南有一石長四十丈高五尺當中有戸及扇若人之掩戸故老以爲玉女房　輟耕錄宮闕制度の一條云有侍女房三所あどるふく〳〵

小兒額書犬字廿六

年山紀聞ヨ大府記為房卿日記康和五年八月廿七日云東宮遷御高松第戌四刻御出宗通卿御額奉書犬字先日女房奉仕爲房卿の子息顯隆卿日記ふを戌刻行啓依可奉書阿也都古人事以予爲御使被申院爲章按るふ犬字をめくるを阿也都古人をくとひくう〳〵と云り按するふ依可奉書阿也都古人事云〳〵とよむべ〳〵阿也都古の名義いかゝ考へゞ此後もさるゝ玉藻承久二年四月十六日乙亥記云皇太子始供魚味御年三歳曉更行啓于高陽院天明之後右大將自閑所方參入奉書犬字之間出御　二十三日今朝資頼朝臣以書狀示送云行啓事一切奉行宮司不候云〳〵抑奉書犬字誰人可宜候乎予答云犬字如先度右大將被參可宜歟　二十六日今曉東宮行啓一條第右大將參入直衣為書犬字也とあり考ふるヨ是小兒を守護の為

の壓勝あり。其證を菟玖波集（誹諧連歌）に犬こそ人のまりありそれ
良阿法師「みとりこの紅さひふらるる文字を見てとつけるる」
まて知へ〳〵。さて此ことは前條にいへる鬼車鳥は犬を畏るれば
彼鳥を禳ふことのわざなり。犬をかそるるは北戸錄に鵂鶹
即姑獲。鬼車。鴟鴞類也。姑獲玄中記云。好取人小兒食之。今時
小兒之衣不欲夜露者。爲此物愛以血點其衣爲誌。即取小兒
也。鬼車今猶九首。能入人屋收魂。爲犬所噬。一首常下血滴人
家則凶。荆楚歲時記。夜聞之捩狗耳。言其畏狗也。　太平廣記
四百六十三　酉陽雜俎を引て。杜鵑。厠上聽。其聲不祥。厭法。當爲犬聲
應之。（今本酉陽雜俎大声に作り）　方以智が通雅に。蒼鷹有九首。智在松江。親
聞之。市人爭作犬聲相逐。相傳。一頭流血著人家即凶。と見え

（厠上聽杜鵑聲說。原出異苑。而津逮秘書本亦作大聲）

又千金方に。姑獲。喜落毛羽於人中庭。置兒衣中。便令兒作癇病
必死。是以小兒衣被不可露。七八月尤忌。とあれば。七八月は殊
にまゝ。あぶなるべし。上に引る大府記八月廿七日の記に。先
日は女房奉仕とあり。廿七日より前にも。書たるもの多を
禳ふのまじなひとあらば。犬は小兒の壓勝となるゆへ。外臺祕要（三十五）に。
小兒夜啼方取犬頭（按に。聖濟總錄百七十。頭に作り）毛。以絳囊盛繫（總錄繫に作り）兒兩
手。立効。（總錄止に作り）とあり。　婦人養草に犬をかいこと。いと拙い。産屋に
用ゆる器あり。産衣を先此犬箱に著せはじめて。其後子に著せる。
箱の内へは守札。又は養屋にて用ゆる白粉畫紙。又は眉をかきたる
入るなり。と。此犬は子もまもる。ゆゑ。なりさて額にかく。
荆楚歲時記に。八月十日四民（今本荆楚歲時記には。八月十四日民とあり。今太平御覽歲時廣記に據て四日の二字を乙

を、玉燭宝典、潛居録ともに八月一日のものとし、荆楚歳時記、此条の注にも一日とあるを載せられ、八十日とあるは誤なるべし　並以朱墨點小兒頭額、名爲天灸、以壓疾、と見えたる説をも、合せなるふや、養生類纂より、瑣碎録を引て、小兒額上、寫八十字、此乃旃檀王、押字、兒祟見則廻避、とあり、是も似たるものなり、

嗟　サヒ

古今集　誹諧歌　出てゆく人をとめんとあきなとりのうたよ

はるもえぬうる　奥義抄云、ものの売買物のさたなる

えつもばあきなまてをものや、物をいふにあきなはしい

いくへをるをばはふるをもてにものいふをあるを、又たくへをる

をりはるひるをも、いむを忌とそなり、　袖中抄云、はるひるハ

行ものもよろこぬものなりされ人のもとへ物をんだるはじめをとり

の人乃をる所をもしらんを、をもてもしらんをしかん人いたとあるべきなり、

或云、物いふ人のものに成れたひ企るをはふるをもをばなりとい

枕草子云、（后宮）れをばかりのやとをををふるはいくふいるかえと

けいをるにあらせく、臺盤所の方にをるを云くむられあれ

てをろうそうごとするなりよくくそいくせのひぬえく

さても、誰うかくみくさわざしつくんと、たくををろはきをと、

思ゆれだえ、これを考ふるふ、物いふ時他の人をるひるをいふ

とそそうごとなりといふ説をしかるべし　つれくぐ草云、ある

人清水へまゐりるに、老る尼の、行つをたりをるが、道をゞら

ふをめくくといひをてゆられば、尼はをの、行るををくのものを、と、

をひられどもいくへをを、狂いひやまぢりるを、度ことはをて、

うちうちたちて、やとなれるとき、くすぐるにはぬべし死ぬる
ありとやきをば、屋一るひ君の、比叡山よりすぐ口にそも
やはるひあらんとなべ、くすぐるかといひそ。　文段抄云、
乳母方のあるはよ、其児の啼る時、こうして人を成合せそ、
又人さめといふなり、もはるを合せざれいそのはるをむこる
児よ害ありといひあるはきり、こは故よ、今もまた力あるふ鼻の
糸とてまきを糸をつけて、児のたれひるを、彼をを合せてハ
是ふ、その糸をむすびあり、按ずるに糸も久しきをもるり、むすびハ白糸あるりき、永久四年百首題仲七夜哥よ引ハ糸をむすべるとふ
そそひすぐいくよりげ代のうぶつるらん　中原高忠軍陣聞書云、鼻をひ、馬の身ふるひ
をるを、落馬いつまも凶あり、上帯をもちめをし、服装をも去
免をもべし　隨兵次第事云、馬のいぞゆるをついて、吉凶すど

山槐記治承二年十一月十二日未点皇子降誕御鼻貢以練糸結之如恒

宝石類書宮方御祝次第云御

生遊ばし候て其儘そすーの糸ようり合せ一丈二尺ばかりひさせるを度一七夜結申候

ありを、同其主をあるををるを、又まろびをれるを時、其兒の
上帯をあるくゆひ、たんーをべし」。すどあるを皆あーきをと
ちをり。　夜光珠云、小説家の書よ、啼る時の呪よ、休息万命
急〻如律令、と唱ふるといふことあ、此息万乃反、産をれを、休産
命といふべきをよとあるりて、休息良恵といひあーハをるなるべし」。
按よ此呪文簾中抄、塵嚢抄、拾芥抄あるをえ、ふり真俗雑記よハ伏息万命云〻ふはくもり
の鼻ふるを時、ふるーあくとを万家といふを祝ーあるを言なり。
もろこしも此るをあり、資暇集云、今人毎啼必祝所祈云云
疑耀云、宋王易燕北録、契丹俗、戎主及太后嘖啼、近位番漢
臣僚、齊道沿夔離華言、万歳也、今嶺外人、嘖嚏、亦或呼曰大吉
利市者、即此意、　知新録云、燕北録云云、齊呼沿夔離、沿夔離

者、如中國之呼万歳也、今人家小兒、毎嚏、其母必呼千歳、亦又此意、直語補證云、燕北録云云、齊聲呼治夔離、（按本遼史拾遺國語解亦治夔離ヨ作る、燕北録原本沿夔離ヲ作ル）猶漢呼万歳、今鄕里俗傳、小兒女嚏、亦呼百歳及大吉、以解之、四分律云、世尊嚏、諸比丘咒願言長壽、時有居士、嚏反（按ヨ法苑珠林及ニ作ル）禮拜比丘、佛令比丘咒願言長壽、（按ヨ此ヲ四分律第五十三ヨリ出テ文長シ、此語ハ法苑珠林百十三ヨリ四分律ヲ省略シタルヨリ轉用セリ）通俗編云、法苑珠林、世尊嚏云々、按今童婦輩猶相承襲、古今譚槩云、安給事磐、蜀人、初度避生、同僚尾至所在、蔡巨源戲曰、聞一老鼠、避一瓶中、猫捕之不得、以鬚略鼠、鼠因噴嚏、猫在外呼曰、千歳、鼠曰、汝豈眞爲我壽、誘我出欲嚼我耳、安遂出、（按ヨ蜀人ヲあざけりて鼠ヲ鼠と云フ、近峯聞略、湖海搜奇、燕居筆記、鯖堅瓠集、通俗編、霏屑集、陔餘叢考、ホヽヲ見タリ）笑林廣記、譏刺部云、昔有一猫、擒鼠、趕入瓶内、猫不

捨、猶在瓶邊守候、鼠畏甚不敢出、猫忽打一噴嚏、鼠在瓶中曰、大吉利、猫曰、不相干、佛你奉承得我好、只是要吃你哩、枕草紙ヨ又云、ものゝ（ほ）なるもの、正月一日のつとめてさいそふはかゝる　源爲憲の世俗諺文（寛弘八年自序）嚏則禱言、四部律云、時世尊嚏云々（按ヨ文珠林ニ同ル）今案、今俗正月元日、若早旦嚏、即稱曰（按ヨ袖中抄白ヲ作リ）千壽（袖中抄秋ヨ作リ）万歳、急々如律令、是（袖中抄此下因字ヲ作リ）緣也、何只在元日哉、尋常須（袖中抄此字ヲ作リ）禱之、とあり、按ヨはるをむるをのこと、ものゝ、元日いとさゝにいふをゝ、ゝてよきゝとといひ、ゝるなり、元旦嚏のゝ、もろこしにもいふ、帝京景物略云、正月元旦五鼓時、不臥而嚏、嚏則急起、或不及衣、曰卧嚏者病

乞子石　廿八

肥前國風土記云、船帆郷、同天皇巡狩之時、（按纒向日代宮御宇天皇）云々、御船沈石四顆、在其津邊、此中一顆、（高六尺徑五尺）一顆、（高四尺徑五尺）無子婦女、就此二石、恭禱祈者、必得妊産云々、　竹村潮橋（立義）日光参詣記云、子種石、長五尺ばかり、前に多居あり、子なき人此石ふいのる時も、必ありとぞ、と云り、按するに、ながもとろこ、ふとあり、

太平御覽（五十二）郡國志云、乞子石、在馬湖南岸、東石腹中出一小石、西石腹中懐一小石、故僰人乞子於此、有驗、因號乞子石、

太平寰宇記（七十九）戎州南溪縣、乞子石、在州南五里、兩石夾青衣江樹、對立如夫婦之相向、古老相傳、東石從西乞子將歸、故風俗云、人無子祈禱有應、　閩書に、福寧州、霍童山、那羅巖有石室數十丈、寺建石室之内、頂石如彈、搖之則動、祈嗣者、祝彈爲應、莫不如響、などいへり、

石不可蹈（廿九）

和州舊跡幽考に、添上郡祓戸宮の垣、森のほとりに、劔先の石といふあり、此石をつきたてもふこなばあらうなんといひつたへ、ゆるといへり、按するに、もろこしの、録異記云、新北市、是景雲觀、舊基、有一巨石、大於柱礎、人或坐之蹈之、逡巡如火燒、應心煩熱、因便成疾、往往致死、　又云、蜀州晉源縣山亭中有二大石、各徑二尺、已來出地七八寸、人或坐之、心痛往往不救とあり、

摩挲石（卅）

雍州府志云、愛宕郡、月讀神宮、祈安産者、参詣、摩挲神石、則必有感格云、按するに、もろこしにも、産ばとあり、祈ばとも、大明名

勝志云、湖廣襄陽府、襄陽縣、亀山、上有礫礫石、襄人以三月三日來遊、卧擦其上、謂可免災患、とゝ

石咒病　卅一

雍州府志云、葛野郡、櫻宮、今患者、詣斯社、拾社邊之小石、而歸家則其病果瘳、而後始所拾之石、又添一箇石、置社頭也、按もとゝ、ところ〳〵も、肘後方云、治寒熱諸虐咒法、發日執一石於水濱、一氣咒云、習習圓圓、按ふ外臺秘要ふ崔氏を引て習習團團ふ作もり行路非難、捉取瘧鬼、送與河官、急急如律令、投於水、不得廻顧、とゝ

藍尾　卅二

錦所談云、列見ノ藍尾、西土ノ説多トイヘドモ、湘按ふ綈ふ作るへし素雜記云、酒巡匝爲藍尾、南朝有異國進貢藍牛尾、長三丈、人傚之以爲酒令、コノ説是ナルベシ、其藍牛尾ノ長シテ、盤桓タル皃ヲトリテ云ナラン、此間ノ制コレヲ以テ知ベシ、按するふ此ふ綈素雜記云、蘇鶚演義云、今人以酒巡匝爲啉尾、即再命其爵也、云南朝有異國進貢藍牛、其尾長三丈、一云藍頴水、按ふ洞隱叢話前集ふ綈素雜記を引て此下ふ牛の字あり其尾三丈、時人傚之以爲酒令、今兩盞從其簡也、此皆非正、行酒巡匝、即重其盞、蓋慰勞其得酒在後也、又云啉者貪也、謂處於座末、得酒最晩、腹癢於酒、既得酒巡匝、更貪婪之、故曰啉尾、啉字從口、是明貪婪之意、按ふ是まで演義の文なるべし今本の演義この条脱文たり此説近之、余觀宋景文公、守歳詩云、迎新送故只如此、且盡燈前婪尾盃、又云、稍倦持螯手、猶殘婪尾觴、又東坡寒食詩云、藍尾忽驚新火後、遨頭要及浣花前、注引樂天寒食詩云、三盃藍尾酒、

一楪膠牙餳。按ユ寒食の詩ユあゝば七年元日對酒五首の其三ゝ乃用藍字蓋婪藍一也とあり。藍牛尾の說い引ゝる蘇鶚ゝ正にあゝぶといひ錦所の取もるゝをいゝふぞや。藍尾ハ唐の代乃俗語ゝて後世知もぐゝき語ゝり。ゝれども今諸說を拳ゝ參考ユ備ふ。清異錄云婪尾酒乃最後之盃。容齋四筆云白樂天元日對酒詩三盃藍尾酒一楪膠牙餳。又云老過占他藍尾酒病餘收得到頭身歲盞後推藍尾酒春盤先勸膠牙餳而藍尾之義殊不可曉河東記載申屠澄與路傍茅舍中老父嫗及處女環火而坐嫗自外挈酒壺至曰以君冒寒且進一盃澄因揖遜曰始自主人翁即巡澄當婪尾蓋以藍爲婪當藍尾者謂最在後飲也葉少蘊石林燕語云唐人言藍尾多不同藍字當作啉出於侯白酒律謂酒巡匝末座者連飲三盃爲藍尾蓋末座遠酒行到常遲故連飲以慰之以啉爲貪婪之意或謂啉如燻如鐵入火貴其出色此尤無稽則唐人自不能曉此義葉之說如此予謂不然白公三盃之句只爲酒之巡數耳安有連飲者哉侯白不聞有酒律之書也蘇鶚演義亦引其說　庚辰集注云呂東萊詩律武庫曰婪尾猶吳越人稱臨尾蓋鄉語也　七修類藁云藍澱也說文云澱滓涅也滓涅者渾濁也據此則藍尾酒乃酒之濁脚如盡壺酒之類故有尾字之義　宛委餘編云婪尾又曰啉尾一云啉爲燻如鐵出火貴其出色此尤無謂　名義考云白居易詩三杯藍尾酒藍又作婪廣韻飲酒半罷半在曰闌當作闌尾爲是淳于髡所謂主留髡而送客當此之時能飲一石者也　月令廣義月令不容

淳于髡語出史記滑稽傳

齋隨筆云云今按藍者助語辭猶俗云撒尾也如作闌珊之闌亦可あるを考ふべし　皇朝みくを白詩より依て三盃飲事をいへる也

附識　錦繡萬花谷及び知新錄並云或云藍頡水其深三丈時人知新錄无此二字取以爲酒とあるを上に挙たる緗素雜記より引たる演義の文をいくう改たる謬說あれば本文より載げるなり

五木　廿三

或人問ていはく五雜組より五木のみをいひて史載劉裕與諸人戲餘人並黑犢以還劉毅擲得雉及裕擲四子皆黑一子跳躍未定裕厲聲喝之即成盧又曹景宗擲得盧遽取一子反之曰

劉裕事出晉書劉毅傳

異事遂作塞則盧與犢塞皆差一子耳大約黑而純一色者爲盧相半者爲雉黑而有雜色者爲犢塞と見えたる成演繁露より八四黑而一白則其采名雉と有るのみにて說異あり いづれを是とせむ答云五雜組の盧と塞の說を是なり其外いまく非かも演繁露の五木の說ハ藝林学山通雅ホカ稱譽されど確論もなくんと誰もそなへ爲なれども此るまたぬ臆說なり今五木經及び國史補みて考るに五木經より誤字なり國史補みて正すべし五木ハ兩面みて一面ハ黑く一面ハ白し其うち二木の黑き面に犢を畫くき其背の白き面より雉を畫あれども誤あれば今ハ畫なるまあるべきなり

右より出る圖上あるを盧といふ采下なるハ盧の背ふく白と
いふ采なり二雉三黑を雉と〻二犢三白を犢と〻一雉一犢
三黑を塞ともなるなりまた演繁露より雉ありといふる四黑一
白ハ禿なり此餘も采名あれどとゝふ用なれバいたづら五木
經國史補を見て知るべし（知新録より雉犢塞を誤るなり五雑組より同し潛確類書より雉を紅点と注しるも亦誤なるなり論なし）
附識も五雑組より曹景宗擲得盧云〻といひしも亦誤なり景宗
ハあらぬ韋叡なり梁書韋叡傳より曹景宗擲得雉叡徐擲
得盧遠取一子反之曰異事遂作塞とあり是ハ景宗雉を
得るゝ叡盧なるハ雉より勝ゆるなり四ざと一犢を反して雉
を出して塞の采となるなり雉より負んとてあり　四庫
全書提要四より五木經一卷唐李翺撰記樗蒲之戲元革爲

之注程大昌演繁露疑所述與史語不合然謂樗蒲久廢不
傳賴有此文而五木之形製齒數粗亦可考顧大韶作五木
辨則謂按以古六博格五之法殊相繆戾知此經是翺所戲
作借古樗蒲盧白雉犢之名以行打馬之法實非古之五木
所引後漢書梁冀傳注及列子楊朱篇注考證甚詳合二人
所論觀之則是書爲翺自出新意明矣とあり按もるハ五木
經の說史語より合ざるなり右よりいるがめ程氏の合ぶを疑へるハ
樗蒲經よりあるなり又顧氏の五木辨いまだ見ざれども
梁冀傳の格五の注列子の六博の注を以て考證をもて
論ずるハ足らぬ誤なり是ハ五木といふとよりも異な
る戲なり五木ハ晉以來にえるを李翺ハ采の數を

定しあらん。

折木四　切木四（曲）

萬葉集十卷ゑ。切木四之泣（カリガチ）とあるを。代匠記ふ注して云。六卷の長歌乃中れ。折木四哭をもそのゑを引く。かりぎねと讀べきより。釋しゐりき。折木。切木ともゑ。苅義あれいうをといふゑ借用ゆへさを。彼処ゑも。此処ふも。四の字を添るいふりまんゆらもとゞ。狛諸成が萬葉考云。此切木四を。鴈ゑ假さるを。幹蘖（ミキヒコバエ）枝葉の四つを一まゑ切ハ。種もて苅とるばうりの小木也。萬葉集略解云。折木四哭。或人云。折ハ斷の誤也。孟莊子造鋸截斷木器とあり。四を器の誤ゐるべし。鋸の音うくと。ゆゑれば。かりのうをゑ用ゐるあらんといへり。などあり。按ずるゑ。代匠

記の折木四哭をかりぎねとよむべきの説。諫ゑ是たり。解ゐ諸説ともふ皆非ゐり。考ゐるふ。折木四。切木四。ゐる前条ゑいふる。五木の類ゑて。四木ふくゐる戯也（折字。又切字を加へゐハ。長木ゐるぬ。或ゐ四木）亦。もゐゐしにもいう。演繁露ゑ。樗蒲經（二）舊畫只有四木（二）四木者博子四箇也。と見えゐり。さて四木をカリの假字ふ用ひゐるを。和名鈔雜藝具ゑ。陸詞云。槼（音軒加利）槼子（ハ）樗蒲采名也　又雜藝類ゑ。樗蒲和名加利宇知とあり。五木ハ。盧を貴采とゝなゝどを。四木ハ槼（カリ）を貴采とゝ。槼をうちさるを勝とゝれバ。樗蒲の名とせゝるべし。（按ゑ。樗蒲を五木とゝ。晉書載記ゑあり）又萬葉十卷の三伏一向をツクとよませ。（按ゑ。新撰万葉ゑ。三里をツクとよませゐ。もゝ。そて里ハ裡の省略書ゐるべし。後の物ゐ。孤樹裏談ゑ。裡の省文を里とゝゐ）十三卷の一伏三向をコロとよませゐるも。皆此四

木の采乃名ある〳〵。後世むさ〳〵といふもいとうちまや。
十訓抄よみうど一伏三仰不來待書暗降雨戀筒寢とうを
ゆひく。色をよめと。殆をくり。月よみをこぬ人やるうきて
しあめもふるをんわびつゝもぬんとよめりそれば所孔色白保
里ふくりとあん云く。ちうべのうつむきさいといふ物なり按ふるうつあそむ
さううつむきうするを。笑米
らてむさ〳〵とりしてすや一つふて。三つあふむるを。月夜よいく〳〵
と詠り。万葉よ據也ハ一仰三伏とゝ出べきを。むが笑して書誤り。
それよ法きく。説をおうけるをんん。按ふ十訓抄ハ江談抄ふかつきたるうや。彼抄ふ一伏三仰云ふのかのこをのせるハ。
今本ハ詞を佚〳〵なるなり〳〵又按るよ。槙ハ梟まや。梟を貴采とをく〳〵。韓非
子。戰國策。周禮考工記注。孔子家語。前後漢書注。晉書。異苑。筹
よ出るり。

梅園日記巻第三終

国立公文書館
National Archives of Japan